

愛と自己犠牲：
星の王子さまの死の意味について 第二部

眞 柳 麻 美

Love and Sacrifice : The Meaning of Death in *Le Petit Prince*

— PART II —

MAYANAGI Mami

現代社会に対するサン＝テグジュペリの批判

サン＝テグジュペリにとって飛行機の墜落は、穢れのない瞳を取り戻すことだけをあらわしているわけではありません。そこには現代性に対する批判も込められているのです。批評家たちは、サン＝テグジュペリが飛行士として直接現代社会に関わり、そこに存在する問題を発見した、と言っています。サン＝テグジュペリの作品の中で、社会問題が文化的な文脈において扱われる場合は、人々が邪悪となり対立しあっていた戦間期のフランス社会に対する批判となっています。サン＝テグジュペリは飛行士兼作家として20世紀はじめを生きました。その時代に人々は、社会の工業化、現代化、都市化を経験し、技術革新による恩恵を受けていました。しかし、それと同時に失うものもありました。この点に関して、James E. Higgins は以下のように書いています。

...this active participant in the machine age is... sharing with his readers his... concerns about the soul of humanity, which seems to have been abandoned as a result of the fast pace and over-riding materialism of a new age.¹

(訳) 機械の時代における、この社会への積極的な参加者(注:サン＝テグジュペリ)は、人間らしい魂に関する懸念を読者に伝えようとしています。人間らしさは、新時代の圧

¹ James E. Higgins, 4.

倒的なマテリアリズムと慌しさのせいで、捨て去られているように見えるということを読者に訴えています。

サン＝テグジュペリは作品の中で、新時代のマテリアリズムに影響されて腐敗した人間の魂について書いています。そして読者に対し、この問題について考え、解決するように訴えています。

サン＝テグジュペリの飛行士という職業は最先端技術を利用していました。現代性を非難しているその本人が現代の工業化社会を象徴しているとも言える飛行士だったということは、矛盾することのようにも思えます。しかし、自分自身が当時の最先端技術である飛行技術に直接関わることによってサン＝テグジュペリは、工業の発展に伴う負の影響を目の当たりにすることができたのだと思います。サン＝テグジュペリは単なる理論家でもなく、また、工業の発展から取り残された偏狭で時代錯誤な人物でもありません。公平な判断力によって、工業技術による利益と不利益の両方を読者に伝えようとしているのです。サン＝テグジュペリは、工業技術の発展を基本的には大いに評価し、その産物である飛行機を賛美して、“L'avion est une machine sans doute, mais quel instrument d'analyse! Cet instrument nous a fait découvrir le vrai visage de la terre”（飛行機は、機械には相違ないが、しかしまたなんと微妙な分析の道具だろう！この道具がほくらに大地の真の相貌を発見させてくれる：堀口大學訳）と、「人間の土地」の中で言っています²。サン＝テグジュペリにとって飛行機は、人や物を運ぶだけでなく、それ以上の機能を持った特別な道具でした。飛行機は人を物理的に地上から引き上げ、目に見えない社会の枠組みから引き離すのです。そしてサン＝テグジュペリ自身が、世俗の邪悪さから解放されることによって社会を冷静に分析する能力を培ったのです。

しかしサン＝テグジュペリは、飛行機を単に賛美したわけでもありません。技術革新の象徴である飛行機と人間の関係について懸念を表しています。20世紀はじめの飛行機は、現在のようにコンピュータによって制御されたものではなく、極めて原始的なプロペラ機だったために、飛行士たちの死亡率はかなり高かったのです。そのために飛行士たちは、自分たちを取り巻く自然と対峙するために極度の緊張を強いられていました。飛行機の乗客にとっては、単なる背景にしか過ぎない空の雲、山の頂、水平線近く的大海の波などが、飛行士にとっては、致命的な危険を意味していました。飛行士たちは、飛行士を職業として選んでしまいましたが故に、自然に潜む危険の信号を見逃すことができなくなってしまったのです。一瞬の気の緩みが、飛行士の命を奪うことになるからです。サン＝テグジュペリは、以下のように表現しています。

² Antoine de Saint-Exupéry, *Terre des hommes* (Paris, Gallimard, 1939), 54.

La machine, qui semblait d'abord l'en écarter, le soumet avec plus de rigueur encore aux grands problèmes naturels. Seul au milieu de vaste tribunal qu'un ciel de tempête lui compose, ce pilote dispute son courrier à trois divinités élémentaires, la montagne, la mer et l'orage.³

(堀口大學訳)

最初は、彼を自然界の大問題から遠ざけそうに思われた機械の利用が、反対に彼をいっそうきびしく、それらの問題に直面させることになる。自分に向かって暴風雨の空が決死する、広大な法廷にただ一人で立って、この操縦士は、自分の郵便物を、山岳、海洋、雷電と名のつくこの三つの、劫初依頼の神々に対して争うのである。

最先端技術である飛行機とその操縦士は、自然に対して戦いを挑む(“dispute”)ことを余儀なくされています。本来、自然の脅威に打ち勝ち、人々の生活をより安楽なものにするという目的のために発達してきた技術の、まさにその発達によって、人間が、かつては存在しなかった種類の困難に立ち向かわなければならなくなったのです。人々は工業技術を発達させ、自然の驚異に打ち勝ち、人間の限界を打破するための新しい実験の実験台にさせられたのです。サン＝テグジュペリは、現代における技術の発達が孕んだ矛盾を指摘しているのです。

しかし、サン＝テグジュペリが批判しているのは、技術そのものではありません。サン＝テグジュペリは、自分たちの欲するものの価値を吟味することなく、その欲望を満たすためだけに技術を使う人々を揶揄しているのです。彼は言います。

L'usage d'un instrument savant n'a pas fait de toi un technicien sec. Il me semble qu'ils confondent but et moyen, ceux qui s'effraient par trop de nos progrès techniques. Quiconque lutte dans l'unique espoir de biens matériels, en effet, ne récolte rien qui vaille de vivre. Mais la machine n'est pas un but. L'avion n'est pas un but: c'est un outil.⁴

(堀口大學訳)

精巧な機械を駆使することは、きみを決して乾燥無味な技術者にはしなかった。現代技術のあまりにも急速な進歩に恐れをいだく人々は、目的と手段を混同しているようにぼくには思われる。単に物質上の財宝をのみ希求している者に、何一つ生活に値するものをつかみえないのは事実だが、機械はそれ自身が決して目的ではない。飛行機も目的ではなくて一個の道具なのだ。

³ *Terre des Hommes*, 30.

⁴ *Terre des Hommes*, 49

技術によって人々を根本的に変えることは決してできません。機械は人間を制御するためのものではありません。サン＝テグジュペリは、機械は単なる“*outil* (道具)”であり、人間はその道具を正しく使う方法を決めなければならない、ということを読者に自覚させようとしています。二つの大戦で、最先端技術は破壊力として使われました。そのため、工業技術の進歩そのものに恐れを抱く人たちは、工業技術が人々を隷属させるほどの力を持ちかねないと考えます。しかし、戦争が引き起こされ、工業技術が間違った使われ方をしたのは、人々が邪悪な考え方を持っているからです。結局工業技術は、人々の発明という才能の単なる産物でしかありません。工業技術を所有する人間は、それに対して道徳的な責任を持ち、工業技術を正しく使わなければいけないのです。サン＝テグジュペリは、人々がそこを見落としていると考えています。人々には、真の幸福のために工業技術を使うための道徳が欠けているのです。そして工業技術の真新しさに興奮しすぎて、その使い方を吟味することが重要であることに気づかないのです。

このようなサン＝テグジュペリの批判的な視点は、「星の王子さま」にも反映されています。この物語の中では、飛行機が、飛ぶことは決してありませんでした。本来は人々に大きな利便をもたらすはずの飛行機が、人の世界から隔絶された砂漠に墜落してしまったために、飛行士である語り手は“*une question de vie ou de mort* (生死を分ける問題)”に直面してしまったのです⁵。「星の王子さま」のこの始まりは、工業技術の革新に伴う危険を忘れないように警鐘を鳴らしているのです。この語り手は、砂漠に飛行機が墜落したことによって、星の王子さまと出会い、かつて手にしたことの無いような友情を王子さまと発展させます。王子さまとの出会いの直後に飛行士は、この少年が穢れた大人たちには見ることのできない“*un éléphant dans un boa*” (大蛇のお腹の中にいる像)を見抜く純粋な眼を持っていることに気づきます⁶。この逸話を通してサン＝テグジュペリは、現代の読者に対し、王子さまの惑星間旅行の逸話から読み取れる風刺を理解するための準備をさせているのです。王子さまは、大人がそれぞれ一人ずつ住んでいる小さな惑星を旅します。大人たちと小さな王子さまとの会話から、サン＝テグジュペリの現代人にたいする風刺が徐々に明らかになっていきます。

しかし、無垢な少年のこの惑星間旅行を分析する前に、「人間の土地」(*Terre des Hommes*)という随筆に見られるサン＝テグジュペリの思想について議論したいと思います。この議論によって、後に論議される「星の王子さま」にみられるサン＝テグジュペリの風刺が理解できると思います。

⁵ PP, 11

⁶ PP, 14

「人間の土地」に見られる批判

工業技術の発展に影響されながら変化を続ける環境によって、人々は盲目的になっています。車や電車、飛行機といった新しい輸送システムの迅速性の影響で、人々は互いの関係を深める間もなく擦れ違っていきます。また人々は、新しい種類の仕事に従事しながら、新しい社会の新しい慣習に適応しなければならなくなっています。サン＝テグジュペリはこのことを次のように言っています。

Chaque progrès nous a chassés un peu plus loin hors d'habitudes que nous avons à peine acquises, et nous sommes véritablement des émigrants qui n'ont pas fondé encore leur partie. Nous sommes tous de jeunes barbares que nos jouets neufs émerveillent encore.⁷

(堀口大學訳：進歩の一つ一つが、わずかにぼくらが体得しかけた習慣の外へ少しずつぼくらを追い出したのだ。だから、いわばぼくらは、故国から離れはしたが、まだ新しい国家を形成するにはいたらない移民たちと同じようなものなのだ。僕らはすべて、いまだに新しい玩具がおもしろくってたまらない野蛮人の子どもたちなのだ。)

若くて未成熟な人々は、自分を取り囲む新しい環境と、自分たちの手にした新しい道具に興奮するあまり、その道具を正しく使うことができないのです。サン＝テグジュペリは続けて次のように言っています。

Ainsi dans l'exaltation de nos progrès, nous avons fait servir les hommes à l'établissement des voies ferrées, à l'érection des usines, au forage de puits de pétrole. Nous avons un peu oublié que nous dressions ces constructions pour servir les hommes. Notre morale fut, pendant la durée de la conquête, une morale de soldats.⁸

(堀口大學訳：

こうして進歩の熱にうかされて、ぼくらは多くの人を鉄道の敷設や、工場の建設や、油井の掘削に従事させた。その間ぼくらは、これらの施設を行うのも、結局は人間のためにするのだという事実をいささか忘れがちだった。征服が続けられたあいだじゅう、ぼくらのモラルは、軍人のモラルだった。

現代の人々は、工場や鉄道、油井を建設することに熱狂し、自分たちの品位を下げています。そして、自然の中で平和に暮らしていたかつてとは違い、健全な人間ではなくなっているの

⁷ TS, 50

⁸ TS, 51

です。人々は工業技術の進歩という名の奴隷システムに組み込まれ、道徳観念を失くしています。

さらにサン＝テグジュペリは、現代人が制御しきれないほど貪欲になり、所有に対する欲望を満たすためだけに生きていると嘆きます。現代人は本能によってのみ生きる野生生物よりも劣っているとこの作家は書いています。彼は、自然の産物のみによって生きる野生動物である *fénech* (フェネック：砂漠に生きる小さなきつね) の例えを挙げています。この小さなきつねは、自然と共存しながら生きようとしています。このきつねは、木に住んでいるかたつむりをすべて食べつくすことはせず、かたつむりが繁殖して数を増やしていけるようしているのです。サン＝テグジュペリは、この小さな野生動物の知恵に感銘を受け、“S’il se rassasiait sans precaution, il n’y aurait plus d’escargots. S’il n’y avait point d’escargo, il n’y aurait point de fénechs (堀口訳：彼がもし、手当たりしだいに、たべていったのでは、やがて蝸牛は絶滅してしまうはずだ。もし蝸牛がいなくなったら、フェネックも存在できないはずだ。)” と書いています⁹。サン＝テグジュペリは、自然から読み取れるメタファーを人間にあてはめているのです。人間は、その事実になかなか気づきませんが、あらゆるものを盲目的に消費し、自らの絶滅に向かっているのです。

サン＝テグジュペリは、道徳と知恵を失った現代人に対する懸念を示しています。彼の目には、人間は、“fourmilière humaine (人間の蟻の巣)” に住む小さな蟻となり、自分たちの行動を省察することなく野蛮な欲望に従って生きているように見えています¹⁰。人々は、自分たちの欲望が、すべてを破壊しつくそうとしていることに気づいていないのです。サン＝テグジュペリは繰り返し、“Je ne comprends plus ces populations des trains de banlieue, ces hommes qui se croient des hommes, et qui cependant sont réduits, par une pression qu’ils ne sentent pas, comme les fourmis, à l’usage qui en est fait” (堀口訳：ぼくにはもう理解ができない、あの郊外列車の市民たち、自分では人間だと信じているが、じつは彼らの感じない圧力によって、その用途からいうと蟻のようなものに退化してしまったあの人たちを。)と言っています¹¹。“Réduit” (矮小化した)人々は、もはや自分たちの生を生きてはいません。サン＝テグジュペリは、“Dans les villes, il n’y a plus de vie humaine” (堀口訳：都会にはすでに人間の生活はなくなっている)と書いています¹²。

蟻のような現代人は、急速に成長する輸送システムを利用して都会に集まり、物質的な所有だけを求めています。所有権を侵害されまいとする彼らは自己中心的となって孤立しています。サン＝テグジュペリは、この側面を“En travaillant pour les seuls biens matériels, nous

⁹ TS, 134 Accordingly, Saint-Exupéry uses the Fénech, small fox, as a wise thinker who gives the little prince the famous axiom “on ne voit bien qu’avec le coeur. L’essentiel est invisible pour les yeux” in *Le Petit Prince*

¹⁰ TS, 67

¹¹ TS, 150

¹² TS, 149

bâtissons nous-mêmes notre prison. Nous nous enfermons solitaires, avec notre monnaie de cendre qui ne procure rien qui vaille de vivre” (堀口訳：物質上の財宝だけを追うて働くことは、われとわが牢獄を築くことになる。人はそこへ孤独の自分を閉じ込める結果になる、生きるに値する何ものをも購うことのできない灰の銭を抱いて。)と云って批判しています¹³。この孤立化は、自然と共生していた現代より以前にはあまり見られなかったことです。サン＝テグジュペリは、“Dans un monde où la vie rejoint si bien la vie, où les fleurs dans le lit même du vent se mêlent aux fleurs, où le cygne connaît tous les cygnes, les homes seuls bâtissent leur solitude” (堀口訳：生命がいかにも気やすく生命に出会い、風のベッドの中であってさえ花とまじり、一羽の白鳥は他のあらゆる白鳥と知り合いの、この同じ世界に棲みながら、ひとり人間だけが、自分の孤独を築きつづけている。)と云っています¹⁴。サン＝テグジュペリは、現代の社会に生きる人間の利己的な特性と孤立化を批判しているのです。

「星の王子さま」に見られる風刺

この種類の批判が「星の王子さま」の根底にも流れています。この物語の中では現代人の邪悪な側面が、“grandes personnes (大人)”に象徴されています¹⁵。現代社会の大人たちはあまりにも盲目的で、“serpent boa (大蛇)”に飲み込まれた目に見えない“éléphant (象)”を見ることが決してできません¹⁶。この象は純粋な心を持った子供にしか見えないのです。大人たちは、目で見ることができて、手で触ることができるものにしか興味を持ってません。手で触れる物質とお金とで自らを満足させようとするために“les rapides (特急電車)”で行ったり来たりしながら忙しく動き回っていますが、自分たちが本当に欲しいものが何であるのかは分かっていません¹⁷。そして物質とお金が真の幸福と精神的な満足感をもたらすことはないということに気づきません。サン＝テグジュペリは、：“ils ne savent plus ce qu’ils cherchent. Alors ils s’agitent et tournent en rond (人々はもはや、自分たちが何を探しているのか分からない。それでみんなが、落ち着きなくくるくと走り回っている)”と表現しています¹⁸。彼らは、出口のない迷路の中で迷子になっているのです。

サン＝テグジュペリは、無垢な子供の視点から迷路に迷い込んでしまった“grandes personnes (大人たち)”を風刺しています。「大人たち」は、年をとり社会の評価システムに影響されるにつれて人間にとって最も大切なものは何かということを少しずつ忘れていきます。彼らは、美しいものをそのまま評価する代わりに、美しさを表現するための特別な言語

¹³ TS, 35

¹⁴ TS, 57

¹⁵ *Le Petit Prince*, 9

¹⁶ PP, 10

¹⁷ PP, 80

¹⁸ PP, 80

を使うようになります。サン＝テグジュペリはこのことを以下のように皮肉っています。

Si vous dites aux grandes personnes: “J’ai vu une belle maison en briques roses, avec des geraniums aux fenêtres et des colombes sur le toit...” elles ne parviennent pas à s’imaginer cette maison. Il faut leur dire: “J’ai vu une maison de cent mille francs.” Alors elles s’écrient: “Comme c’est joli!”¹⁹

(訳) もしあなたが大人たちに、「僕、ピンクのレンガの綺麗な家を見たんだ。窓にはジェラニウムが置いてあって、屋根の上にはハトたちがいてね……」といっても、大人にはそれがどのような家なのか想像できません。大人たちには「10万フラン相当の屋敷を拝見しました」と言えば、やっと「それは大変けっこうなお屋敷ですね!」と興奮するのです。

「大人たち」は、お金の価値しか評価しないのです。彼らにとって花や鳥、美しい色は、評価の対象ではありません。子供時代には持っていたはずの想像力と美的感覚を失ってしまった「大人たち」は、物価や数字に置き換えることによってしか物事を理解することができません。現代の資本主義社会に生きる大人たちの価値観は、経済システムに基づいています。サン＝テグジュペリは、現代のこのような側面を嘆き、風刺しているのです。

現代人に対するサン＝テグジュペリの風刺は、星の王子さまと小さな惑星に住む大人たちとの会話から読み取ることができます。王子さまは自分の星を旅立ち、たくさんの惑星を訪れます。そして、精神的な満足感をどうすれば得られるのかということを知らない大人たちと出会うのです。王子さまが初めに会った王様は、“l’*autorité* (権威)”しか評価せず、自分が、“le droit d’exiger l’*obéissance* (服従を要求する権利)”を持っていると信じています²⁰。この世の全てを服従させることができると主張する王様の権威に感心した王子さまは王様に、太陽をすぐに沈ませて欲しいと頼みます。しかし王様は、それならば太陽が沈むまで待たなければならないと答えます。この王様は、太陽が沈むときにだけ太陽に沈めと「命令」できるのです。王様は、愚かしい妄想によって宇宙に存在するすべてのものを支配している信じ、人々が自分の命令に服従するためだけに存在していると想像しているのです。この王様の想像力の使い方は、純粋な心を持った子供たちのものとは全く異なります。次に王子さまが出会った大人も、王様と同じような特徴を持っていて、自分以外の人間が彼を誉めるためだけに存在していると信じていました。

王様とうぬぼれ男は、人間が自己中心的な特性を持っているということ、自分たちを取り巻く他人にも尊重されるべき自我があることに気づかないものだということを象徴している

¹⁹ PP, 20

²⁰ PP, 40

のです。Drewermann は、王様のこのような精神状態を以下のように表現しています。

It's typical of such senile monarchs that they always have to be judging, condemning, and sentencing people; and they won't accept correction. The armor of their prejudices is impenetrable. ...One of the sad points made by this fairy tale is that nowhere in the story do we get even a hint of how the "big shots" (adult human beings) might possibly undergo a positive transformation. Their incapacity for dialogue, their spiritual isolation, their narcissistic ghettos know no bounds.²¹

(訳)年をとった専制君主が、人々を批評したり、非難したり、罪を定めたりして、他者からの訂正は受け入れないとうことはありがちなことです。そういった君主たちの偏見というよろいを貫くことはできません。この物語のひとつの悲しい点は、果たして大人が良い方向に変化を遂げることがあるのかということに関しては、この物語のどこにも答えらしきものが見当たらないということです。大人たちは限りなく、対話をする能力に欠け、精神的に孤立化し、自己愛的なゲッターに立てこもっています。

このような大人たちの性質を、無垢な子供は理解できません。王子さまは惑星を去るとき、*“les grandes personnes sont bien étranges (大人たちはすごく変わってるな)”*と言います²²。王子さまのこの言葉が、サン＝テグジュペリの現代の人々に対する風刺を最も良く表現しています。

〈つづく〉

(まやなぎ まみ 本学非常勤講師・英語)

²¹ Drewermann, 29

²² *PP*, 41